

平成27年度 広島文化学園大学子ども・子育て支援研究センター講演会（講演要旨）

親子の関わり —子育て あ・い・う・え・お—

大阪総合保育大学児童保育学部長

講演者：大方 美香 教授（おおかた みか）

日時：平成27年12月12日（土） 10：00～12：00

場所：広島文化学園大学・短期大学 広島 長束キャンパス 講堂

大方美香教授のプロフィール

専門分野（研究テーマ） 保育学・幼児教育学 乳児保育 保育課程
聖和大学教育学部卒業

聖和大学大学院教育学研究科にて教育学（幼児教育学）修士号取得
自宅を開放して地域の子育てサロンぶらんこを主宰

大阪市福祉サービス第三者評価事業評価決定委員会委員長

奈良市等の子ども・子育て会議委員長

主な著書：

「保育課程に基づく指導計画～その実践・評価～」（共著 ミネルヴァ書房）

「乳幼児教育学」（久美株式会社）

「新 現代保育原理」（共著 建帛社）など他多数



はじめに 正解はひとつではない！

ただいまご紹介に預かりました大阪総合保育大学の大方と申します。よろしく願いいたします。わざわざこの広島にお呼びいただきましてお出会いはいただけたことに感謝してお話を始めさせていたいただきたいと思います。90分くらいと聞いていますので、しばらく一緒に考える時間を過ごせたらいいのかなと思っていますところす。

話をする前に簡単なワークをしたいと思いますが、親指と人差し指で丸を作ってみてください。自分の方向でいいですよ。耳で聞いてそして行動してもらっていいです。親指と人差し指で丸を作りましょう。ちょっと隣の人を見てください。別に何が正しいってわけではなくて。どうぞキョロキョロ見てください。

今私が言った言葉は、親指と人差し指で丸を作りましょうと言ったわけですね。片手でこういう

風にされた方がいました。両手でした人もいました。別に、私は片手とか両手とか何も言っていないので、右手とも左手とも言っていませんから、どっちでもよかったわけです。小学校の先生なんかでこういう風にする人もいます。コンパスのイメージで、親指と人差し指で丸をかきましょって言ったときに、こういう風にする先生もいます。

何が言いたいかということ、同じ言葉を聞いたとしても、いろんなことを皆さんは頭の中で想像するんですね。自分の人生の中のその時の記憶であることがパッと思いつくことで私たちは行動します。その時に隣の人と一緒にいたらほっとするんですね。今隣の人と一緒にいたら、あーよかったって。なんか安心します。でももし違っていたら、「あれ～？大方先生はいったいどっちが正しいって言うんだろう？」とドキドキして、不安に

なって、白黒つけたいような気分になってしまうんですね。

これは特に、今日のこの親子の関わりとか子育てとか、また、子育て支援ということが国をあげて言われる時代になりましたが、答えは決して1種類ではない、こうじゃないといけないなんていうことは、ないということですね。いろんなご家庭があって、いろんな親子があって、いろんな働き掛けがあって、いろんな子どもたちがいます。皆さんの人生がみんな違うように、姿・形が違うように、歩いてきた道が違うように、いろいろあるのだということを前提に考えていきたいと思えます。皆さんのおっしゃっていることは間違っていないですし、相手の人が言うことも別に間違っているわけではなくて、そのことをまず前提に、子育ての支援をしていただきたいと思えます。ですから、どうしても自分の人生の物差しを当てはめて、こうじゃないといけないって言いたくなることあるのですけれども、その辺のところをイメージしていただきたいなと思って、お話をしました。

子育てはマラソン

その次に、ちょっと隣の人とじゃんけんしてください。一人の人は、前の人、後ろの人でいいです。勝った人からちょっと自己紹介をしましょう。どうぞ、じゃんけんほい。」
(じゃんけん、自己紹介をする。)

「自己紹介終わりました？じゃあもとに戻ってください。せっかく地域の子育ての方もいらっしゃるって、学生さんと出会っていただきたいと思えます。では前を向いてくださいますか。親子とか保護者とかいろいろな言葉の使い方がありますが、今、子育ての支援、子育ての支援といろいろ言われていますが、いったい何を支援するのでしょうか。子育て支援って何ですか？

まずここでも答えは1種類じゃないのです。子育て支援、子育て支援といろいろ言われるけれども、いったい何を支援するのかを特に学生さんは考えてほしいですし、来られおられる方にもまた考えてほしいです。子育て中の方は、何を求めているのかなあ？何をしてもらったら、子育てが少しほっとするのかな？ということ、考えていただけたらいいのかなと思っています。いろいろあ

ります。

保育と子育ては一見似ているのですが、親子というのはある意味で、ずっとずっと長い人生と一緒に歩くのです。幼稚園の先生とか保育士さんとか、小学校の先生とかは、ある一定の時期に出会う人です。お医者さんも、病気の時に出会う人です。親子とか子育てというのは、皆さんもそうだと思いますが、自分の親との関係は、広島に大学入って来られた人も、一緒に住んでいなくても、腹が立とうが、仲良しであろうが、親子というのはずっとずっとつながっていく。ちょっと年配の方々もおられますが、自分が子どもにとっての親の自分と、ある意味で自分と、生きてらっしゃるかどうかは別にして、自分の親との関係というのは、ずっとそれはそれで残っていきます。長い長いマラソン、長距離ランナーの子育てです。ですから、今日だけ、一瞬、全速力で頑張ればいいというわけじゃなくって、長く付き合っていくことになります。

後で出てきますが、一番しんどいのが、まず生まれたばかりの子どもかもしれません。そして大学生の皆さんぐらいになってきたときでも、もしかしたら保護者の皆さんは悩んでいるかもしれません。小さい時の方がよかったと思っているかもしれません。

子どもと軸とした課題解決

逆に、皆さんは皆さんで、小さい時は大好きだった自分の親との関係も、大人になってきて、もういやだなー、考え方がちがうなー。なんで理解してくれないんだということがああるかもしれないのですね。だから小さい時だけが子育てではないのですね。

ただ、今言われているのは、大きく言えば就学前のことが中心になっている部分があります。とくに乳児の時期が、一番しんどいって言われている部分があります。その時に、まず、子どもを軸とした課題解決が必要です。子どもっていったい何？赤ちゃんっていったい何？これが分からない。どうやって育てていいか分からない。だから、しんどいのです。生まれてすぐ病院から帰ってきて、ふにゃふにゃの軟体動物みたいな我が子を前にして、かわいいと思っていたけれども、生まれてきたらかわいいと思う前に毎日泣いてばっ

かりでどうしていいかわからない。誰か助けてくれたらいいのですが、夜中も泣く、眠れない。寝不足、いらいらする。本当はかわいかったはずなのに、泣かなかつたらいいけど泣いたらやっぱりいやだ。またはそう思う自分が許せなかった、こんなはずじゃなかったと思う人もいるでしょう。

たまたま私も子育て支援を30年くらいやっているのですが、だんだん保護者の考え方や、大人社会のいろんな課題が背景にありますけれども、どんどん便利になって、どんどん合理的になってきて、人としゃべることがなくなってきた。情報は、全部ネットワークでとれるようにはなったのですが、逆に情報がありすぎて、どれを選んでいいのかよくわからない、ということになってきている。

ある方が、(子どもが) 2歳になりました。2歳になったらしゃべってネットに書いてあった。本を読んでも、2歳になったら少なくともしゃべって書いてあった。そのお父さんとお母さんは子どもを虐待するような人ではなく、一生懸命子育てをしている人です。2歳の誕生日の日、ビデオを備え付けました。「よし、今日は2歳だ。きつと何かしゃべるに違いない。」朝からお父さんもお仕事を休んで、お母さんと一緒に、「最初なんて言ってくれるかな、パパって言ってくれるかな。いや、ママが先よ。」など期待して、その日、今日は何をしゃべるだろうと待っていました。

ところが、その子はしゃべりませんでした。「え？ 2歳なのに、今日誕生日なのにしゃべらない。」びっくりしてお医者さんに行きました。検査をしました。どこも悪くありませんでした。何気なくお医者さんが、「ところで、おうちで何しゃべっていますか？」と聞きました。するとそのご夫婦はお医者さんに怒りました。なぜ怒ったのでしょうか？

「それでは、近くの人と話してください。じゃんけんて勝った人から話始めてください。1分間差し上げます。」

(話し合い)

はい、一分経ちました。一分って割としゃべれるので、学生の皆さんも聞いてばかりじゃなくて

一分でも考えて、自分の中でも問題意識を持ってもらえたら嬉しいなと思います。

今のはどういうことかという、2歳になればしゃべると思っていたお父さんとお母さんがいました。学生さんも、保護者の方も地域の方も考えてもらいたいのですが、2歳になったからしゃべるのでしょうか。人間には「教育」が入っていて、2歳になったから勝手にしゃべるのではなくて、2歳になるまでに誰かがしゃべってくれたり、口を動かす人間に出会ったり、あやしてもらって口をパクパク開けたり、じーっと顔を見つめたり。たまたま日本語だから日本語を耳にするだけで、しゃべるようになります。私のいとはアメリカで生まれてアメリカで育て、日本人ですけれども、英語しか分からないです。これが生活です。耳にする言語、言葉を、日々の中で、単語帳を作って覚えるわけではなく、自然に覚えて、しゃべるようになる。単語力なかったらしゃべれない。何をしゃべっていいか分からない。または「アー」って声を出すというこういう機能の発達もあります。

何月何日に今日は声帯が発達したとか、何月何日に今日は表情筋が発達したとか、分からないのが乳児の難しさですね。かつてはいろんな人があやしていました。「いない・いない・ばあ」あしたり、べろべろばーしたり、おじいちゃんおばあちゃん、地域の方々が、「赤ちゃん生まれたの？」って言って、いろんな人がかまってくれて、気がつけば笑って、気がつけばしゃべる時代だったのですが、今の例では、そのご夫婦も一生懸命育てて、2歳になったらしゃべるようになると思っていたので、その日までは大事に大事に、静かに静かに、通気性のいいマンションでずっと静かに暮らしていたので、結果としてその子は言葉を耳にするチャンスがあんまりなくて、静かに大事に寝ていたので、言葉を交わすということがうまく学習できなかったのですね。

その後、ちょっと働きかけたらあつという間にその子は他の子に追いついて、今ではちゃんと喋っています。でも、同じようなことがあって、それは一例ですけども、分からないというのはそういうことです。もしそういう人に出会ったときに、「何してるの、お父さんお母さん、そんなことしちゃダメでしょう！ どうして今までほっと



いたの」と、周りの人が言ったら、「そんな、一生懸命子育てをしていたのに、どうしよう」と余計に落ち込んでしまいます。または、その子に対して「この子の育ちが遅れたのは私の責任。」とその子が大人になっても思ってしまうかもしれない。もし皆さんがそういう方に出会った場合、またはもしそういう思いをしている保護者の方、子育て中の方がいらっしゃったら、子どもが素敵・すばらしいのは、気がついたらすぐに追いかけてくることができることを伝えることです。発達の可能性って言われますが、少し気づいたら、ちょっとだけ緩やかかもしれないけど追いかけてきます。誰かのアドバイスとか、こうしたほうがいいんだよって言ってくれる人がいないと、4歳になって幼稚園に行くまで気がつかないかもしれない。

今は地域といっても、道を歩いていてもなかなか子どもが自転車に乗って走り回るような時代じゃないです。治安も悪くなってきて、子どもだけで遊びに行ける時代でもありません。これからますます人口が少なくなるので、子どもと子どもが出会うようになることも少なくなります。お母さんとお母さんやお父さんとお父さんが出会っていくことが少ない。

そういう意味で今いろんな地域の子育て支援センターとかサロンとかそういうところで、一緒に会いましょう、一緒に子育てしましょうということで、いろんなところでその場所を提供し、そういったアドバイスをする人が実は求められています。

これまで、家族のおじいちゃんやおばあちゃんとか、ご近所の方が「こうやってすんねんよ」というようなことだったのですが、今は、それは

教育的な配慮、社会的な中でしないと、うまくいかない時代になったよということちょっとだけ知っておいてください。

保護者自身の問題

二つ目は、保護者自身のことです。お父さんやお母さんに決して悪気はないのです。今言ったように、自分の子供時代、親になるまでの時代、皆さんが大学生になるまでの時代、小さい時、年齢の若干高い人生の先輩、その方たちは自分の子ども時代、歩んできた時代、どんな時代だったかな、ということ考えてみてください。この数年、どんなふうに大人社会は変わったかな、ちょっとそんなことを考えてください。1分差し上げます。皆さん子ども時代と今の時代、何が一番変わったでしょう。

(話し合い)

いろいろあると思いますけれども、一番変わったのは、今のような対話をする場面です。つまり、スマホとかラインとかネットワークがどんどん広がった中で、家族の中であったとしても、「ごはん」ということについても、それを使うとわざわざしゃべる必要がない。友達同士でも、隣にいても、ラインをしているかもしれない。それくらい声を出してしゃべること、顔を向き合わせてしゃべること、井戸端会議といわれるようなことがなくなり、公衆電話がなくなりました。子どもたちは「もしもし」と電話で聞く話し声すら聞かなくなってきました。

ネットの中に情報はたくさんありますが、それは現実の生の情報ではなく、架空の情報です。それが自分の子にぴったりなのかどうか。同じ2歳だと言われても、「2歳なのにもう英語しゃべってんの？うちの子こんなん無理だわ」とか「もう走ってんの？うちの子まだ走ってないわ」となる。つまり、現実はその子を見たときに必ず月や生まれた月齢や、家族の関係や、自然があるのか、一人で子育てしているのか、全部違いがありますが、情報がいっぱいあるとどうしてもそのことにとらわれてしまい、しんどくなってしまいます。

逆に言うと、それは現実の自分の子どもさんと、ネットの中の子が一緒かどうか分からない、だから何にも心配することないと申し上げたい。

目の前で顔を見合せて、「こんにちは」って言ったときには話ができるけれども、架空のお話の中で、それができなかつたとしても心配したりすることはありません。このことは、学生さんに知っておいてほしいですし、支援する人も知っておいてほしいですし、今日実際に来られている方も知っておいてほしいなと思います。

「想定外」はみんな一緒

もっといえば、今、親になってらっしゃる方々ご自身、今日来た学生さん自身も、遊んだことがなかつたり、小さい時にそんな泥んことかしたことないよ、とか、生まれたときから紙おむつあったよ、子どものときからネットだったよ、ということもあるでしょう。その中で、コントロールするってどういうこと？とか、わからないこと、見たことがないこともあるでしょう。赤ちゃんなんか見たことないまま親になる人がいるのも当たり前です。抱っこしている人を見たことないまま大人になる人がいるのも当たり前です。

さらに身近に、相談する人がいない、どうしていいか分からない、協力してくれる人がいない、一人で子育てしなくてはいけない人やひとり親家庭の方もとても増えています。また、子どもの貧困もとても増えています。どうすればいいでしょうか？

もっと困るのは、若いご夫婦、別に若いとは限りませんが、子育てをするときに、裸ん坊で生まれてくるので洋服がいる。おむつ代がいる。ミルク代がいる。実はひとり家族が増えるということは、お金もかかってくる。「こどもが生まれたらお金がいることは、聞いてなかつたし、知らなかつた。こんなはずじゃなかつた。」。父親が「僕のお小遣いが減るなんて、予定外や」って思うかもしれない。当たり前なのですが、そのことでご夫婦がトラブルになることだってあるかもしれない。苦しくなることだってあるかもしれない。たたくたくないけど、イライラすることも、自分が我慢しなくちゃいけないことで、ストレスが溜まることもあるかもしれない。

お母さんの方も、今まで一人で好きなおとこに行けたのに、赤ちゃんがいたら出かけられない、お友達と遊びに行こうと思うのに、連れて行かないといけな。誰か預かってほしい。そのような

要望があるので、今、保育所がどんどん増えている、一時預かりとか、小規模家庭的保育所です。ちょっと預かってもらえる場所が必要になっているのは、今までのように、家族や身内の中で、ご近所の方に、「ちょっと見といて」といえる時代ではなくなってきたためです。ちょっと見てもらったり、できるような場所がないと大変です。もし、皆さんに熱があったとしましょう。赤ちゃんが目の前にいます。一人で子育てしています。熱があつて自分が看病してほしいのに、自分の子どもがそこにいたらどうしますか？赤ちゃんに私のご飯作ってとは言えないし、泣くし。という方もとても増えている中で、どう社会的に支援しますか。

生涯続く親子の関係

生きる力って書いていますが、子育ての中で、一番大事なことは、その子が、人間として社会にどうやったら適応していけるか、という問題です。どうして個々の子が人間らしくなっていくか。子どもを育てるということは、単純なように見えるけれども、実はその子が、この社会の中で人間としてうまく適応して生きていけるようにすること。さて、どういうことでしょうか。

これだけを見ていくと、小さい時だけのよう。乳児さん子育てって言ったらここだけがまるでこの小さい赤ちゃんの時だけが子育てのように見える。少なくとも、幼稚園に行くくらいまでは、3歳までかなとか、いや小学校に行くまでかなと思うけども、実はずっとつながります。もっと言えば、皆さんはこの続きの大学生ですけども、大学生になったとき、自分の子ども時代をなかつたことにはできない。特に親子関係はそうです。この小さい時のことが中学生になったり思春期になったりしたときに、いろいろ現れてくる。この時のことが、後々いろいろ影響してくるので。

今、子育て中のお母さんは、今だけと思わないでほしいのです。あれもこれも全部無理です。長い長い人生の中でこの子が20歳になったとき、18歳になったとき、どんな親子でいたいかな、ですね。それは学力とか受験力とかいう前に、親子として、大人になったときに、どんな親子でいたいかということです。もし、お父さん・お母さん自

身が病気になったとき、自分の子どもに何を求めるか。自分が年をとったとき、自分の子どもに何を求めるか。実はそういうことを考えて、この乳児期幼児期を育ててほしいと思います。今は、赤ちゃんは何もできないから、自分が抱っこするかもしれない。ですが、自分が年をとったら、今度は自分が抱っこをしてもらふ番になるかもしれない。今は何かご飯を食べさせてあげたり、世話をしたりするばかり。何かしてあげることばかりでしんどいな、と思うかもしれませんが、実は、自分が年をとったら、子どもに食べさせてもらわないといけないかもしれない。今はお金がかかって仕方がないと思うかもしれないけれども、自分が働けなくなったら、今度は子どもにお世話になるかもしれない。

時代は変わっていきますので、どうなるかはわかりません。私は、5人介護をさせてもらって、大方さんのお嫁さんとして、介護を5人して、今、実家の父親が倒れたので6人目の介護をして、たくさん介護がほぼ同時に走り続けて何年目みたいな感じになっています。いろんな介護をしてくると、その人の子ども時代のことがみんな出てきます。小さい時のことが、年をとって亡くなるときにまで影響してくるのです。

もし、今、子育てが苦しくて大変だなって方がいらっしゃったら、それは今のことじゃないと、子どもに言っておいたらいいと思います。「今、私、車に乗せて送り迎えするけど、あなたが大人になって、免許を取ったら一番に私に乗せるのよ」と。「彼女より先に」と言ってもいいかもしれません。今、あなたは病気なのでよしよししているけど、お母さんが病気になったときには必ずよしよししてねって。こうやってしてほしいと言っておいたほうがいいかもしれません。

それくらい、人生がつながっていることを、ちょっと意識していただきたいです。「私、子どもを産むとき何もしてもらわなかった。親子関係悪かった。そのような場合はどうしますか?」。その人はもう一回子どもと一緒に遊ぶことです。子どものもっているエネルギーは高いです。学生さんはまた実習に行ったときに、子どもに触れることもあるかもしれませんが、子どもたちからエネルギーをもらう、元気をもらうと思います。お母さんがしんどいとき、何にも出来なかつ

たら親子で背中と背中をひっつけて、「お母さんしんどいんだよ」ってください。いい親をやろうとか、格好良く生きなければということは何にもありません。しんどかったら、背中合わせにして、「充電させてよ」ということもあってもいいと思います。

子育てが楽になるための「子育て支援」

赤ちゃんは、ハイハイをして、次に、歩き始めます。3歳ぐらいになると人間らしくなっていきます。しかし、2年たったら3年たったらこれくらい人間らしくなるということが、なかなかイメージできない。寝ているとき以外は泣いてばかりいます。まだしゃべれません。

皆さん1分やってください。もし、今、皆さんがしゃべれなくなりました。動けなくなったとしましょう。のどが渴いて仕方がありません。目の前に水があります。でも手が使えません。こういう状態、寝たきりの状態です。のどが渴いて、目の前にあるのですが、どうしますか?

(話し合う)

「はい、結構です。しゃべれない、動けない、泣くしかない、またはじたばたできたらじたばたするしかない、ですね。ですから、子育て中のお母さんお父さんにつたえたいのは、なんで泣くのって思うかもしれないけど、言葉を持たなければ泣くしかない、ということに分かって欲しいです。動けなかったらじたばたするしかない、ということですよ。

ですから、歩けるようになって2歳になるくらい3歳未満までは、誰か大人が、サポートしないと、自分ではどうしようもできない。ということを知って欲しいと思います。乳児保育やる人も同じですが、「なんで? おなかが痛いのか? どこが痛いのか? ちゃんとしゃべりなさい」とか言って怒られる子がいます。親子ですから怒りたくもなりません。いろんな本に、褒めてあげなさいって書いてありますが褒められないのが親子です。

先生や保育者はプロなので褒めていいと思いますが、親子は毎日の生活を共にしています。ご飯作ったり掃除をしたり洗濯したり、いろんなことをしながら、介護があったり、仕事を持って帰ったりしています。生活しながら子育てはあります。ですからもし学生さんは保育者に

なったときに、お母さん何で？お父さん何で？と思わないでください。一生懸命したいんだけど、ご飯作らなきゃいけないでしょとか、別にそんなこと言うけど、おじいちゃんの介護をしなければいけないでしょうとか、仕事持って帰ってしなければいけないでしょうとか、そんなこと言うけど夫婦げんかもするでしょうとか。その中で、子育てはあるということを理解してください。

保育園とか幼稚園は、そういった雑用のない中で、専門家としてかかわっていくので、先生という立場を、保護者の方や親御さんに求めないようにしてください。子育て中のお父さんやお母さんは、先生ではないのですね。むしろ家に帰ってお互いにほっとしたり、本音で付き合えるようなこと、お互いに癒したり、怒った後「ごめんね」って思ったり、なんで泣いているのかなと思いがら、「そうか、しゃべれないから仕方がないな」ってことに気付いていたり、「動けないからだな」って思ったりしながら生活をしているのです。

「どこがいたいのか」って言っても、皆さん、おなか痛いってそのおなかで言葉、何歳で知りました？「なんか今僕おなか痛いな」それを意識して理解するのは何歳ですか。「頭が痛いんだ」とか「僕の気持ちは今嫌なんだ」とか「うれしいんだ」とか「悔しいんだ」とかですね。気持ちを、言語に直せるようになって理解できるのはいったい何歳ですか？

2歳の子どもは「相手の気持ちを考えなさい」と言われても、自分の気持ちも意味も分からないのに、相手の気持ちはよくわからない。むしろ分からないから、「うれしいね。これがうれしかったんだよ」。褒めるといっても、「うれしかったんだね」と言ってくれる大人がいて、「これがうれしいってことなんだ」。「嫌だったんだよね」と言われる。これは保育者の方でも親御さんでもいいのですが、子どもは「嫌だったんだよね」って言われて、「そうか、これが嫌という気持ちなんだ」とか、「悲しかったね」って言ってもらって、「これが悲しいんだ」とか、分かるようになります。

気持ちはイライラする。誰かが説明してくれたら分かるけど、それがなかったら分からない。だから、子育ては難しいのです。3歳までの子育てがなぜ難しいか。子どもが説明してくれないからです。その子どもはまだ説明ができない年齢なの

です。いらいらするお父さんやお母さんのために、子育て支援センターや保育所で預かってもらうことができれば、少しホッとすることができ、少し優しくなれたりするかもしれません。

「あー、そういう意味があるんだ」。今日の話の講演会もそうですが、「そうか、しゃべれないのは当たり前なのだ」。ちょっと思ったら、もしかしたら許せるかもしれない。「もうなんでうちの子だけが」って思っているけども、「みんなこんなもんなんだ」って思えば、少し子育てが楽になるかもしれません。

子育てが困難な時代

以前、大阪で虐待がありました。3日間放置されていて、その子は死んでしまいました。後でいろいろ検証したら3日分のおむつと3日分の飲み物のおやつはありました。何が問題か。ここにペットボトルがあります。ペットボトルが3日分3本置いてありました。何歳でこれを開けることができるかです。ここが、子育てのボタンの掛け違いなのです。

お母さんは、ちゃんと飲み物用意して外出しました。殺すつもりじゃなかった。飲み物をちゃんと用意していた。ですが、このペットボトルを小さい子どもは開けられなかった。目の前に水があつたとしても、これを開けてくれる人がいなければ飲めないのと一緒にですね。これが、学生さんの場合は、発達について勉強します。しかし、子育て中のお母さんは何も発達を勉強して親になったわけじゃない。大人だったら簡単に開けられることが難しいかもしれない。「そうか子どもは開けられないんだ。これって固いよね。」

みなさんこうしていただきます？手首を。こうやって手首が動くようになるのはいったいいくつくらいかな？おもちゃがあつてこうして振ると、昔のガラガラとか、こうして振っていると、なんだかガラガラで遊んでいるように見えるけれども、気がついたら手首を動かしています。動かしながら、気がつけば手が育ちます。これがおもちゃの役割です。または水道の蛇口でもいいです。こうしてひねっていると気がつけば、毎日こうして「どうすれば水が出るんだろう」ってやりながら、手首を動かすかもしれない。

ダイヤル式の電話があつた時代は良かったんで

すね。指を入れてこうして親たちが毎日電話をしていると、大人たちが「もしもし」ってしていると、子どもは、電話をとって、「これは誰の声や」って一生懸命聞いたり、ダイヤルを回すまねっこ遊びをして、気がつけば、一生懸命電話を回すことによって、手首が育つので。

意図して育てようと思わなくても、よし、電話を回すんだという真似をして気がつけば育ものがありました。そういうことが、今は生活の中では育ちにくい。だからそのお母さんも決して悪気はなかったのですが、結果的には、子どもが死んでしまうことになった。

今は異物の混入の問題もあるので、おやつやの袋なんかかなり固いです。なかなか昔のような紙袋に入っていませんから、破れない。ということは食べられない。

おむつも用意してあっても、自分で替えられるのであれば、おむつはいりませんよね。そのあたりのところが今の子育ての困難な時代になっているということにはちょっと知っておいてください。

ハイハイの意味

じゃあハイハイをする。ハイハイにはどういう意味があるでしょう。ハイハイをしないまま歩いてしまうお子さんもとても多いです。子どもが立ってしまいました。立った時にこけます。さあ皆さんこけました。スーパーマンのように手を伸ばしてください。バタバタ。立ち上がろうと思ったらどうする？手を伸ばしたまま立てますか。じゃあお互いに見合いっこしてください。どうぞ。

(話し合う)

はい、結構ですよ。手を曲げて、この押す力で実は立ち上がるんですね。ではこのまんまで、じたばたです。ということは、ハイハイというのは腕の筋肉が育つ時期なのです。すごいでしょ？なんでハイハイするの？ハイハイしないで立って歩いてくれた方がいいように思います。この腕の筋肉が育つ時期に。逆に言うとハイハイしないで立ってしまったら、それはそれで早く歩いてくれて素敵ですが、気を付けなきゃいけないのは、もしかしたら腕の筋力が育つチャンスが抜けていたので、立った時に顔から突っ込んでこけちゃうかもしれない。こけたときに、自分で起き

ようと思ったときにうまくいかないかもしれない。

別にお母さんが、「ああ、しまった」と思うことはなくて、「そっか、うちの子ハイハイ飛ばしちゃったんで早く歩いてうれしかったけど、その分、腕の筋肉育つ時期が飛んでしまったんで、こけやすいな、顔から突っ込みやすいな。じゃあほかの遊びの中で、鉄棒にぶら下がるときもちょっと気を付けないと、腕が抜けやすいかもしれない」という風に、気づいてくだされば、それで十分です。

ただ一方で、飛ばしてしまうと、子どもというのは育たない分があるので、本当は順番抜かしをしない方がいいのですが、抜かしてしまうことも事実あります。その時には、「あそっか」って気づくようなアドバイスをしてほしいですし、もし今日「うちの子、どうしよう、ハイハイ飛ばしちゃったわ」って方がいらっしゃったら、「ああそうか、腕を使う場面がなかったんだな」と気づいていただいて、本当は他の遊びとか活動の中で、そういうチャンスがあれば、それであつという間に追いかけてきますけれども、そんなことを知っておいてください。

じゃあちょっと皆さんやりますよ。ハイハイの代わりと思って、『もしもしかめよ』の歌に合わせてやってください。」

(歌う・手遊び)

「いけましたか？結構腕がだるくなるでしょう？簡単なことなのに、それで腕がだるくなりますよね。じゃあもう一回行きますよ。どうぞ」

(手遊び)

「結構腕がだるくなりますよね。これがハイハイですよ。ハイハイして良いよというと、ハとイとハとイじゃないですよ。ハイハイをするってことはかなり腕を使っているということです。今「反対」って言ったとき皆さん「え？」って考えたでしょ？はじめハイハイする子ってぶつかるんですよ。だんだんまっすぐいけるようになるんです。「ん？なんでぶつかったんだ？」って泣きながら実は考えています。ハイハイしているように見えるけれど、ちゃんと思考力も使う。そのうちちゃんと記憶する。だから、ぶつからないようにまっすぐハイハイをしていく。

人間ってすごいでしょ？一つのことをしている

ようだけれど、人間っていろんな部分を使って、育っていきます。まさに人間教育って言うけれどもそのもので、ハイハイはハとイとハとイじゃないのですよ。小さければ小さいほど、一つのことにとくさんの意味がある。素晴らしいですね。心理的でしょ？

でもなかなかお母さんはそうは思わないですよ。触らないでほしいし、何またぶつかって泣いているのって思うのが当たり前です。もし学生さんがアドバイザーになったときには、そう説明してあげてほしいし、お母さんがいらっしゃったら、「そうか意味があったんだうちの子には。」「なんですか？」と思ってたけどそんな意味があったんだ」と思っていたら、うれしいなと思います。

経験値と適応力

目の前に手を洗っている子がいます。さあこの子は、何をしていますでしょう。どうぞまたしゃべってください。皆さんだったら、どんな声をかけるでしょう。

(話し合う)

はい、結構です。実はこの子はもう2歳の後半だから、結構腕が長いのです。だから届くのです。もうちょっと頭が大きいのです。1歳2歳になる前ではこの手も短いのです。だから届かないのですよ。だからお母さんが手を布で拭いてあげたりとかしないとうまくいかない。逆に言うと、自分で手が洗えるようになるということは、それだけこのアームが長くなってきた。背中が伸びて、こうして姿勢をまっすぐにして手が洗える。すごいんですよ。ここまで行くのにものすごく人間は時間がかかります。

皆さん今当たり前前に座っていますが、皆さんが今当たり前前に椅子に座れるようになるまでに、いろんな人が関わって、こういう時期も越えて、皆さんは今一緒に座っているのが当たり前です。逆に言うと、支援を要する子どもさん、発達障害の子どもさんの中には、ここに来るまでにすごく時間がかかって、ほかの子の2倍も3倍もかかる場合もあります。それでもゆっくりゆっくりでもだんだんと、単純に手を洗うってことですが、手を前に出して、自分で洗えるようになるのですね。これをよく自立するとか言いますがけれども、これ

は、年齢ではなくって、ちゃんと体が育ってこない、身体性が育ってこないとうまくいかないのですね。

じゃあ今日お母さんで来られている方、手の長さとか腕の長さとか、これは水なんだとか、これは蛇口ですけれども、今は「ピッ」って押せば勝手に水が出るような操作になってきてますでしょ？いろいろ違います。そうすると、それにうまく適応して、「あっ、ここでは「ピッ」式や」「ここでは蛇口や」。幼稚園や小学校に行く前に、違いが分かって、ちゃんとそれに適応できるようにならないといけないのだけれども、だんだん便利になればなるほど、トイレも勝手に水が流れるようになるのが当たり前になると、家では勝手に流れると思っていたら、「あれ？流れなかった」ということになります。家ではレバー式だったけれどもここでは手かざしだとかですね。ここではレバー式やとか、小学校行ったらこうやって足で踏むんやとか。こういう変化に適応できない子どもたちがとても増えています。

いろんなおうちに遊びに行ったりしていた時には、「うちの家と〇〇ちゃんの家は違うんだな」。今日最初にした丸と一緒にです。いろいろあることが、実は子どもたちには、大事なことなのですが、今はなかなか学習しにくい。もし今日、子育てのお母さんが来られていたら、家の中で育てるのは大事だけれども、おじいちゃんの家に行ったとき、おばあちゃんの家に行ったとき、「うまくいかないな」って思うかもしれないけれど、実は子どもにとったら、そのことが、うまくいかなくても、「ここではこうするんだよ」という体験が、人生の中ではとても大事なのだということに、ちょっとでも気づいていただけたらありがたいなと思います。

声かけるときにも、もしかしたら、おばあちゃんは、「ここでは冷たい水しか出ないから、冷たい、家でもお湯やねえ」と言葉をかけてもらったから、そういう体験がまたできるかもしれない。

聴覚、触覚から広がる子どもの世界

声は、音です。音楽の音感教育とかよく言われますけれども、人間の声は音です。サザエさんのうちのタラちゃんみたいに、家の中におじいちゃんとおばあちゃんとお父さんとお母さんと、カツ

オお兄ちゃんとワカメお姉ちゃんと。たくさんの人間がいると、耳にする声の音質、言葉の単語、「あ、あれはおじいちゃんの声や。あれはおばあちゃんの声や。おばあちゃんはいつもこんな話している。お母さんはこんな。カツオお兄ちゃんは小学校でまた野球したとか怒られたとか言っていた。ワカメおねえちゃんは……」家族が多い時には、いろんな声を聞き分けることができました。今はなかなかそういうチャンスが少ないです。

その子育て中のお母さんは何にも悪くない。お母さんの声しか聴いたことのない子が、幼稚園に行きました、保育園に行きました。始め子どもは不応を起こします。びっくりします。お母さんの声が世の中のすべてだと思っていた。違う声、違うしゃべり方をする人が出てくる。だから始めは泣くかもしれません。でも、だんだん慣れていって、聞き分けるんですね。ほかの人の声をちゃんと聴いたり、ほかの人の言っていることの意味がちゃんと分かったりしてくる。これがいろんな人間に、出会っていく良さです。

保育園に預けたらかわいそうかな、とかいろいろ思う人がいますけれども、一時預かりもどうかなって思うお母さんもいるだけけれども、もしそういう機会があれば、これもこの子にとって、もし泣いたとしても、大事な体験だったなって。いい機会だな、「ああ嫌だったんだね。お母さんとは違う言い方だったんだ。お父さんとは違ったんだ。」という風に、むしろ今の時代は、肯定的に考えた方がいいかもしれないです。それくらい子どもたちが、ほかの人に出会えない時代。

今日学生さんもいるので併せて考えてほしいのですが、この子の頭の中は、今は子育て赤ちゃん学、脳科学の時代になっていて、今日はあまり難しいことは言いませんけれども、「ん？なんだろう？」って考えているのです。「これはなんだ？」感触遊びとかよく言う。「これはなんだ？」ですね。「冷たい」とか「いい気持ち」とか、「水って何？」「積み木のように持てないぞ？」「つかもうと思ったら逃げて行った」「あれ？指でこうしたらつながる。不思議やなあ」って。これがすごいんですよ。何だろう？よく感触遊び感触遊びって言われるけれども、水は、単純に手を洗うためだけではなくて、水ってなんだろう？小学校行ったら

これは液体とかいろいろ習いますが、ご家庭においても、「冷たいね」とか「水だよとか」ですね。「面白いよね、不思議だね、水って引っ付いちゃうよね。固くないね、あれ？逃げていくね」これが教育的配慮として、家庭教育でもできることだし、余裕がなかったらいいです。「もう何してんの、早く手を洗いなさい！」これもあります。特に家においては。「さっさとしなさい。」ありかもしれません。

でも、時々思い出してください。「そうか、うちの子は実は賢いんや。考えているんや。発見してるんだ。そうか、今考えてるから時間かかってるんや。」許せる日があってもいいかもしれない。「いや、今日は時間ないからお願い早くして。」これもあります。

ヘレンケラーさんという人がいらっしゃって、目が見えなくて、聞こえなくて、しゃべれなくて。この頃うちの学生に聞いても「それ誰？」って言って知らない人が増えています。皆さんは知っているかどうかですけれども、もし皆さんが見えなくて聞こえなくてしゃべれなかったとき、どうやって人とコミュニケーションをとるのか。

言語というのは、記号なのです。手話でも何でもいいのです。何か通じ合ったものがあつたとき、社会のことがいろいろわかってくる。気持ちが通じると、生きるのがとても楽です。ヘレンケラーさんも通じないからイライラして物を投げたりしていました。これは認知症のおじいちゃんおばあちゃんも一緒です。通じない。苦しいです。

一番最初にヘレンケラーさんが覚えたのが水なのです。サリバン先生という人が、どうしたらこの子と気持ちが通じ合えるかっていったときに、悩んで、水道の水の出るところに持って行って、見えないし聞こえないししゃべれないのだけれども、水が落ちてこの子のように手をかざして、そして手に「みず・みず」。一日じゃダメなのです。来る日も来る日も「みず・みず」。子育てをすることもとっても大変。一日じゃ子どもは理解できませんよ。何日も何日もかかる。大学生が英語の単語を覚えるのに一日で覚えられないのと一緒です。子どもたちも、人生も、水って何かを理解するのも一日じゃ分らない。大人の当たり前なのですが、「水よ。水よ。これは水なのよ」何日もかかって、やっと「みず」って応答したわけで

す。

それから、爆発的に、「これは何？これは何？これは何？」と言って、ヘレンケラーさんはいろんなことを覚えていき、サリバン先生とコミュニケーションが取れるようになりました。

子育ても一緒なのです。最初の一つ、通じ合うもの。だっておなかにいたときに、皆さんは水を知って生まれてくるわけではありません。「あれは食べるものでしょ」って口にいきなり入れられても、食べるものかどうか分かりません。「これはミルクよ」って言って口に入れられても、「何いきなり口に入れるんだよ」びっくりして「ベッ」ってするかもしれません。

「これは食べるものなんだ」とか「おいしいんだ」とか。気づくのにはどれだけ時間がかかっていくのか。これが、子育ての大変さです。ですから、お父さんお母さんが育てている人は大変なのです。すぐにわかってくれたら楽なのに、なかなか通じない。「通じない、通じない、通じない、通じない……」だからイライラします。怒りたくなります。ときには叩きたくなくなってしまうかもしれない。でも、思い出してほしいのです。私達も、実はそうやって大きくなってきて、それは永遠のことではない。小さい時には「これを一生やり続けるのかな」という気持ちになるので、非常に子育ては苦しいのだけれども、本当に最初の三か月、最初の六か月、最初の一年。三歳未満くらいまでで随分さっきのように人間らしくこの子ようになります。

ここまでなかなか待てない。だから今は、いろんな社会的に支援をする時代になっています。お母さん一人でもお父さん一人でも、家族だけじゃなかなか無理なのでみんなでサポートしよう。これが今の、国の仕組みになっています。

「いない・いない・ばあ」と表情筋

じゃあここで出てきました。これは、「いない・いない・ばあ」をしている遊びです。「いない・いない・ばあ」といっても、すぐにするんじゃないのですよ。「何してんの？この大人？」と見ている段階があります。じゃあ隣の人に「ばあ」してください。どうぞ。「いない・いない・ばあ」って言ったとき、体のどこを使っています？

ばあって言ったとき、まず顔の表情筋を使いま



すでしょ？皆さんしゃべるときに、顔を固定してください。顔の表情筋を使わずにしゃべる。顔を動かさずにしゃべる。後でお昼ご飯のときに、顔の表情筋を使わずにご飯を食べてください。うまくできているのです。人間は、微笑み反応って言いますけれども、これってもう2～3か月の間に、泣くと同時に泣き笑い人生といまして、笑うようになります。でもこれは、勝手に笑わないのですよ。笑わしてくれる大人がいないと、この表情筋という筋肉は退化します。

みなさんが今椅子に座っているのも、体に筋肉がついているから椅子に座っています。背筋力が備わっているから、椅子に座っています。プロの選手であっても、ちょっと寝込んだりするたびにあつという間に筋肉が取れたら、うまくいかなくなる。ちょっと寝込んだら、また歩くのも難しくなる。ちょっと事故に遭ったりして寝ていると、いくら若い皆さんでも、筋力が落ちたら、しばらくリハビリをしないと、歩くことも座ることも困難になります。

逆に言うと、子どもたちは、この子育ての時期というのは、何でもないけども、普通に「いない・いない・ばあ」ってしたりあやしたりしながら、実は、気がつけば表情筋が動くようになったよ。笑うというのはすごいことなんだよ。大人たちは一生懸命笑わせようとしてあやしてきました。あやすというのは愛するという言葉を書きます。あやすというのは、技術でも何でもなくて、愛すること。笑顔で接することです。

逆に今アメリカではっきりしているのは、親でなくてもいいとまで言っています。誰か一人でもいいから、絆を作ってくれる人が、3歳未満でいると20歳超えて塀の向こうに行く確率が少ないと

ということが今アメリカの研究でわかってきました。

ですから日本も、社会的な支援をしようって
いっているのは、お父さんお母さんの今どうして
もしんどい。産後でなかなか体の調子が悪い。また
は心を病んでしまった。または経済的にしんど
くて自分ではどうしようもできない。でも誰か、
この時期を通過するように支えてくれる人がほか
にいたら、親子がまた取り戻そうと思ったとき
に、ちゃんとトンネルを抜けるように、ちゃんと
絆を作っておいてくれたら。もっと言えば、人間
を好きな子どもにしておいてくれたら。後の子育て
で、親子関係、またはお友達との関係。社会に適
応しやすいよ。人間嫌いになっていたらなかなか
しんどいよ。ということが言われています。

逆に言うと、今日来られているお母さんも、「あ
あそうか笑うって意味があったんだ。それだった
らちょっとやってみようかな。」「なんであやさな
きゃいけないの？何んで遊ばなきゃいけないの？
そんなことする暇ないよ！」って思っているかも
しれませんが、もし、ちょっとでも、時間が一秒
でもあったら、「ばあ」。これにはそんな5分もい
りません。「いない・いない・ばあ」。一秒でもい
いので、顔を見てにっこり笑ってくださる大人が
いる。かまってくれる、声をかけてくれる大人が
いる。それが良いのです。一秒でもいい。一日一
分でも結構です。たくさんやろうと思ったらしん
どいので。それをしてこの表情筋が動くことで、
かんだり食べたりすることができるようになります。
離乳食も飛ばしてしまう人が多いんですが、
この「ばあ」って言って、口を動かす表情筋を動
かしといてくれないと、モグモグ、カミカミがで
きません。

はい、皆さん口をカミカミしてください。カミ
カミしたり、モグモグしたりするのは人間だけ
です。表情筋を動かして笑うのは人間だけです。ラ
イオンが笑った、犬が笑った、猫が笑ったってな
い。人間は笑うんですね。ほかの動物は丸呑みす
るんです。牛はすりつぶしなんですけれども。人
間は顎を上下に動かします。すごいでしょ？これ
は、元々じゃないのです。ミルクをチュッチュと
吸うこの吸引反応は、これは持って生まれた能力
なんですけれども、顎を使ってカミカミをする、飲
み込む。これは後の学習です。ですから誰か大人

がカミカミして食べている人間を見ないと、真似
ができません。

保育所とか行ってしてみると、ほっぺたに溜め
る子が最近多いです。好き嫌いじゃないのです
よ。カミカミをするということがうまくいかな
かったら、飲み込めないで、ほっぺたに溜める
しかない。「こうやってカミカミするんだよ」っ
て言って、噛む練習をしないと。今日お昼ごはん
皆さん噛まないで口に入れてください。絶対おい
しくないですから。噛むから、味覚、味があつて
おいしいのです。噛まなかったら、食べ物はおい
しくないのです。

だからだんだん高齢化現象の中で噛めなくな
ってくると、おじいちゃんおばあちゃん何食べ
ても、味がないおいしくない。私も介護をしなが
ら、おじいちゃんおばあちゃんが、噛めなくな
ったら何にもおいしくない、何食べても同じだと
よく言っていましたけども、噛むということで
ジューシーな味覚が分かる。逆に言うと人間は、
このカミカミする力を獲得したので、いろんなお
料理、いろんな味付けといったことを、文化的に
作ってきました。好き嫌いじゃないのですよ。噛
めなかったら、飲めなかったら、ほっぺたにリス
くんみたいに溜めるしかない。

じゃあ何が、この表情筋を育ててくれるの？誰
か笑わせてくれるような大人がいないと、表情筋
は動かしなさいって言われて動くものじゃない。
噛みなさいって言われても、そんなのに簡単に動
かせるものじゃない。だから普段から、笑わせて
くれる大人がいる。

そうそうこれ遊びとしても見ていったら、自分
からしたり、真似っこしたり、何回も「ばあ、ば
あ、ばあ」ってしたり。そうすることで、人とか
かわることを楽しくなってきたり、こうやってか
くれんぼみたいになっていたり、育っていきま
す。皆さんの子ども時代はこうやって大きくなり
ました。

大人の環境を敏感に感じ取る子ども

これを見てください。よく赤ちゃん返りとい
いますが、これは子育て中のお母さん、もう皆さん
も知っておいてほしいんですが、この子はとて
も、家庭の養育の状態のいい子でした。お父さん
もお母さんも一生懸命あやして、育てて、毎日

抱っこしてもらえようなおうちです。

ところが、家庭というのは、今の時代もそうですが、何があるか分かりません。一生懸命子育てをしようと思っても、お父さんの会社が潰れた、借金ができた。子どもどころではなくなった。この子のおうちもそうでした。あつという間に遊べなくなりました。

子どもたちは、大人が考える以上に周りの大人の環境に反応します。もし、「なんでうちの子こんなに泣くのかな。どうしてこんなに手間かけるのかな。こんなにしんどいのに。父さんと母さん苦しいのに。邪魔しないでよ」って思うかもしれませんが、実は子どもたちはたとえ赤ちゃんであっても、周りの大人がしんどい時には、その子も意味は分からないけれども、しんどくなります。

それを、お父さんお母さんだけでは解決できないので、今子育ての支援ということで、みんなでなんとかしようね。という時代になっていますが、もしお父さんお母さんいらっしゃいましたら、「あ、この子も一緒に悩んでくれているんだな」って思ってください。「あなたには分からないでしょう。あなたがいなかったら……」と思わないで、「一緒に悩んでいるんだよね」って言う風に、「充電させて？」と思ってもらったらうれしいなと思っています。

モノに触って育つ子ども

さあこの子がいました。この子はなんだか一生懸命おもちゃを見ている。さあ今何が育っているでしょう。もしこの子が物を持たなかったらどういう状態でしょうか。皆さんじゃあ真似してください。物を持ってください。持つ。体の今どこを使っています？赤ちゃんってこうして生まれてきたときこうしているのです。おなかにいるときこうですけども、生まれてからこういう状態です。これが、こうなるのですよ。わかります？こういう筋肉、こういう動きが育つ。

物を持つと思うたら、こういう、物を持つという脇を締めるような動きが、実は育ちます。生きていくときにこれじゃ困るわけです。物をちゃんとキャッチする。すごいでしょ？その時に、別におもちゃじゃなくて良いのですが、何か物があって持つ。

ところが今は、たぶん今日お母さんがいらっしゃったらお分かりだと思いますが、おもちゃじゃなくても、触られたくないのですよ。触ってほしくない。触ったら壊すでしょ。触ったらぐちゃぐちゃにするでしょ。触ったら誰がお片付けするの？と、たぶんお父さんお母さんは思います。

危ない物はどけないと困りますが、本当は、物を持つということは、子どもの人生にとってすごく意味がある。何も持たなかったら、この握りしめるという手の操作する、物を持つ握力も育ちません。だって物を持ってこなかったから。

ちょっと皆さん10回どうぞ。1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10。

握るから離すから。握るから離すから。俗にいうトットン遊びですが。こうすることで、実は手が育ってくる。じっとしていたら、手は育ちません。物を持つから。こうして持つからです。

皆さんが小さい時には、ふすまとか障子があって、開けたり閉めたり、開けたり閉めたり、ストレッチ体操みたいにしていたのです。開けて、閉めてって。それも遊びでした。今はドアになってきてなかなかバリアフリーになってきたときに、便利になったけど、逆に育ちにくい時代になってきた。日々の生活の中で、本当は3歳未満の子は育っていきます。今は便利になりすぎて、逆に育ちにくい。

ほら、この子を見てください。頭がさっきの子より大きくなって、1歳になりたてです。まだ手が短くて、手先がまだ発達してないから、手先が小さいでしょ？これだけ違う。これだけ頭が大きい。これだけ手が短い。さっきの子はシュッって立ってスッと手が出せた。一年でこれくらい違ってくる。でも毎日見ているお母さんは、「早く大きくなって、早く大きくなって、早く大きくなって」と思っています。気がつかないのは当然です。毎日見てたら「なんで大きくならないかな。早く自分で何でもできたらいいなあ」って思っています。本当は、一年違うと随分育っている。うちの子すごいんだな。と気がついてほしいです。

「めくる」って何？

この子は何をしているでしょう。一生懸命ペー지를めくろうとしています。この頃絵本も一冊も

ないおうちもあります。山のように買ってあるのですが、読んでもらってない子、触らない子もいます。別にどっちが正しいわけでもないです。大事なことは、小学校に行くまでに本当はこうやってページをめくる。

ちょっと皆さん十回どうぞ。1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10。

こういう手首の動きというのは、日常生活にはないです。絵本をめくる。新聞をめくる。雑誌を見る。何でもいいのですが、こうやってページをめくる。今、小学校に行って、子どもたちの困難の中に、「はい1年1組太郎君。いきなり教科書何ページを開けて」って先生は言います。めくる？めくるという意味が分からない。字は書けず、読めます。「めくる」と書けます。でも、めくるという意味が分からない。絵本をめくりながら、こうやってめくるということは、生活の中で、「これにこんなん書いているね」って見ていくんですね。「ああここに書いてある。読めないけど字書いてあるんだな」なんとなく知っていくんですね。「次のページにはほら、ライオンが出てくるんだ。」という体験。絵本は、読んだりとか字が読めるようになっていただけじゃなくて、こうやってめくる、自分の目的のページを開ける。そこに何がかいてあるか気づく。よく読み聞かせとか、絵本が大事というのですが、本当は0歳からブックスタートといわれるように、そういう体験の積み重ねがあって、はい、小学校で何ページ、何が書いてあるの。ということにつながります。別に学校の勉強のために子育てがあるわけじゃないのです。でもそういうことも、実は大事な意味があるよ。別に買わなくても、図書館に行って借りることもできます。「ああ意味があるんだ」と気づいていただけたらいいです。

これ見てください。この子の頭、指先。かなり集中しています。「これはなんだろう？」考えています。この子も一生懸命「どうすれば開くだろう？」と考えています。みんなこれ、考えています。いきなり小学校行って、頭が、思考力が、記憶力が育つのではなくて、実はもう0歳から「これはなんだろう？これはなんだろう？これはなんだろう？」だって生まれてから人生、この世はどこなところ？何にも知らないで生まれてくるので、どんどんどんどん知っていきます。この子

も、「落っこちそうだ。踏ん張れ。」こういうことも体験していきます。ちょっと知っておいてください。

そういう面で皆さん、今日お母さん方来られている方は、子育てってばらばらに育つんじゃないかって、一人の人間としていろんなことが育つのです。お父さんやお母さんがしていることの中にはたくさん意味があります。なんだか一見無駄に見えるけれども、実はたくさん意味があります。人間として、全体を見てください。

学生の皆さんも、5領域とかいろいろ習っているけど、ばらばらじゃないということに気付いていってください。

長時間保育 家での親子の時間

最近、保育所は、どんどん長時間になってきました。今日は保育所に預けた方もいるし、これから預けようって方もいるし、いろいろいらっしゃるかもしれない。学生さんは、またこれから幼稚園や保育所に行くかもしれないです。どんどん預ける時間が伸びてきました。こっち8時間こっち12時間です。さあ、問題は、子育て中のお母さんはもちろん、学生さんも考えてください。家にいる時間はどれくらいあるでしょう？これが問題です。8時間子どもが保育所にいる、集団保育にいるということです。朝の8時から晩の7時まで預けるということは、家にいる時間はこれだけ。はい、じゃあ1分またしゃべってください。家と、たとえば、12時間、半分ずつです。でも何が違うでしょう。家にいる時間と、こうやって、保育園とかにいる時間があつたらどう違うでしょう。どうぞしゃべってください。

(話し合う)

はい、結構です。子育て支援の今日来られている方お父さんもいらっしゃると思いますが、この迎えに行く時間は、子どもも疲れている時間、親も疲れている時間、疲れた者同士が出会う時間です。ですから、どうしても怒りたくなってくる、イライラする、お父さんお母さんも疲れている。でも、子どもたちもこれだけ長い時間いろんな人の中でいるということは、当然疲れている。(ですから是非)、でもこれ家に帰ったら寝なきゃいけないわけです。将来は先生になる学生の皆さんは、「家は寝るだけよ」と思っておいてくださ

い。この迎えに来た時に昼間のこと言わないでください。褒めるならそれこそともかく、もし注意したりなんかしたときに報告はいいけれど、「もうこちらで怒りました。家に帰ってどうぞ怒らないでください」と言ってほしいと思います。「また家に帰って怒ってください」って言ったら、寝るまでのわずかな時間しかないのに、このわずかな親子の時間にまた怒っていたら、また泣き寝入りをしたら、いつ親子の心地よい時間があるのか。もし今日お父さんお母さん来られている方いらっしゃいましたら、長く保育の時間受ければ受けるほど、家に帰ってから寝るまでの時間は本当にわずかなので、もうお風呂に入った1分でもいいし、寝る前の1分でもいいし。親子ですから怒ることもあるし、腹が立つこともあるし、仕事で疲れて帰ってきたら八つ当たりしたくなることもあるけれど、子どもたちが嫌われたと思わないようにお願いしたいと思います。どれだけ怒っても叱ってもいいけど、もうこれは皆さん、そう決めてください。朝起きたときの、「おはよう」という時の顔は、普通の顔。でもニコニコ笑わんでもいいです。親子ですから普通の顔。怒ってない顔。または寝てからでもいいので「おやすみ」と言って、「さっきは怒ってごめんね」でも結構です。どっかで「嫌いなんじゃないよ」って。「大事だから、怒っちゃったんだよ」ということを、1秒だけでも伝えようと思ってくださらないと、子どもたちは、これだけ長い時間離れて、寝るまでの時間怒られて、また、朝、目覚めて行くまでに怒られると、子どもは「僕は生まれたい方がよかったかなあ」とか、「僕はだめだなあ」とか、「いないほうがいいのかなあ」とか、どんどん自信をなくしていきます。保護者の方や親御さんが叱ったりするのは、いい子になってほしいから。優しい子になってほしいからという自分の親の思いを伝えたいから、一生懸命怒ったり注意したりするのですが、その思いが伝わらなくて、「嫌われた。いらない。どうせ僕は。どうせ私は。」と思ってしまわないようにしてください。

自己肯定感の低下 名前を呼ばれない時代

日本の中学生高校生は、世界でも稀にみる自己肯定感の低い国ということが、最近文部科学省の調査で分かりました。これは、受験力、学力、関

係ない。偏差値の高い学校であれ関係なく、「どうせ僕は、どうせ私は」という自信のない人が非常に多い国であることが分かってきました。

もっと怖いことに、せっかく名前があるのに、これは大人の皆さんもそうかもしれませんが、名前を言わない時代になっています。小学校に行くまでに家の中で自分の名前を言ってもらえない。怒る時だけ急に固有名詞付き。そうすると、怒るときに、「ケンタロウ！」って言われたら、ケンタロウを辞めたくくなります。なんで「サトシ」じゃなかったんだ。また兄弟がいて、いつもお姉ちゃんばかり、弟ばかり。「どうせ僕は、どうせ私は。」と、それは大人になってもずっと影響してしまう。怒るときもいいけれど、普通の顔の時に、普通に「おはようケンちゃん」「いってらっしゃい。タロウくん」。なんでも良いのです。「おやすみ」でも。それは、学生の皆さんも実習に行ったときにも必ずどの子にも名前付きで「おはよう」って言う時だけは必ず名前付きで言おうって。実習終わるまでには全員名前付きで呼ぼうとか。よほど意識しないと少子化の中では名前すら呼んでもらってない。ワンルームマンションが増えれば増えるほど、名前を呼ばなくても物事は、用事は済んでしまう。「ごはんよ」で良いのです。「お風呂よ」で良いのです。兄弟がいたら、「お姉ちゃん」とか「ケンちゃん」とかという名前を呼びますが、言う必要性もない。そうすると、自分の名前を呼ばれたときの感覚、大人になったときに小さい時の名前と呼ばれた時の懐かしさ、これもこれからの子どもはなくなります。非常に怖いことですね。ですから、ぜひ今日来られているお父さんお母さんいらっしゃったら、せめて、怒った後でも、寝てからでもいいので、固有名詞付きで、褒めなくても結構です。子どもにとというれしいのは普通の顔をして、「さっき怒って怖い顔だったけど、普通の顔に戻って、いつものように名前を呼んでもらった」というこの安心感。私たち大人もそうですよね。叱られたり、注意されたりした後、「まだ怒ってはるな」と感じるのと、「普通の顔になって関わってもらったな」というホッとした感とでは全く違うと思います。ホッとした感を持てるようにぜひ、大事にしていだけたらと思っています。

手探りで始めた子育て支援

今日は偉そうにいろんな話をさせてもいましたけれども、私は30年前に子育て支援を始めました。今のように国がやっていた時代じゃなくて、保育の資格を取り、幼稚園でも働き、大学院にも行って、親になったわけです。知らない土地で。大阪生まれの私が今奈良の法隆寺のお寺のすぐそばにいますが、日本はどこでも一緒だと思っただら大きな間違いです。若気の至りとはこのことみたいな感じですね。知らない土地で子どもを育てようと思ったときに、私自身が知らない人の中にいるということの困難さ。今はネットがありますが、その当時はなかったもので、しゃべってくれる人がいない。どこにお買い物に行ってもいいかわからない。自然がいっぱいあるので、子どもはのびのび育てられると思ったら大きな間違いで、ザリガニを採ったら、ザリガニの水路の持ち主が水利権をもっていた。そうか溝の持ち主がいたのかとか。田んぼがあって空き地があるから走り回れると思ったら、当然ながら田舎は塀がないだけでどこにも所有者がいる。勝手に入ったら怒られる。私が無知であっただけですけども、自然があっても、それは勝手に採っちゃいけないんだ、入っちゃいけないんだ、ということに非常に驚きました。

誰かお願いだから私とお友達になってくださいという気持ちで3年続きました。今はもう国が制度で保護者が出会える場を作っていますが、30年ほど前にはなくて、自力で開墾するように、公園デビューという言葉もありませんでしたから、たまたま山陰で出会ったお母さんと近くにあった公園で待ち合わせをして。雨が降ろうが槍が降ろうがみたい、とにかく毎日通ったら誰かと知り合いになれるかなとしているうち、ほぼ3年かかりました。3年かかります。自力で人と関係を作ろうと思ったら。今はそれを国が、またはいろんな子育て支援センターが代わりの役割をしています。それでも、本当にしんどい人はそこに行けない。ある程度情報があったり、行くだけの余力のある人が来ているだけで、本当にしんどい人は、家から出ることすら苦しい。知らない人の中に入ったら、疎外感を味わいます。みんなが何を言っているのかわからない。みんなが笑っているのに一緒に笑えない自分。行かない方がまだマシ、とい

う気持ちになります。その辺のところは皆さん知っておいてください。

最後になりますが、その子育て支援の中で、今は、臨床心理士とか心身医療であるとか、精神科であるとか、心の病気に関してはかなりいろんなところでケアされる時代になりましたが、約30年前はなくて、一時50人くらい私の家に親子、だから100人くらいが来ていたんです。どんどん物を片付け、場所を作り、みたいな感じで。寮生からは家賃の支援もいまだにもらってなくて、誰も来なくなったらやめようとなんとなく泊めていた人はいつも私のところに、まだ来られるかな？みたいな感じになっていました。その中で私は、就学前だけが子育ての支援かと思っていました。

子育ては長距離ランナー

小学に行きました、中学に行きました、高校に行きました、皆さんの年齢に近いです。本人から了解をとっているところだけ言いますが、彼は18歳になりました。高校に行きました。もうすぐ大学生です。卒業間近で学校に行けなくなりました。とても優秀でした。親も何も困ったことはない、お父さんもお母さんも思っていました。ところが、高校卒業間近に、行こうと思うけど行けない自分がある。何で行けないのかわからない。周りの大人たちも、「どうして？ どうしてあげたらいいの？」。でも、説明できない。大人になっただけでも、もう高校生ですが、それでも説明できない自分がそこにいる。それで、あっちこっちに、その当時、お父さんもお母さんも病院に行ったり、宗教の方に通ったり、いろんなことをして、「どうしてかな？ どうしてかな？」と考えていました。

結局、私の家に2年くらい一緒にいましたかね。所謂不登校の始まりです。今は、どんどん数字が減るところか、この30年で増えてきました。どんどんどんどん増えてきました。その人たちも、もう30歳40歳になってきています。なかなか社会に適應できない。本人は出たいと思っています。引きこもりたいわけでもなんでもありません。家にいるからと言って、暇はありません。体中が神経の塊みたいになって、ものすごく疲れ切っています。クタクタです。私の家のある一室を彼のため

に用意したのですが、それこそ全部閉めて、ですね。さらに部屋の中にダンボールで囲いを作って。その中にお布団を敷いて。赤ちゃんみたいにうずくまって3日くらいは出てこないですね。トイレも行かないくらいの感じです。それが、あるとき、元気な時には、何も言わなくても私がやったのと同じだけの洗濯物をたたみ、私が見ている前で同じくらいの料理を作るくらいです。神経がピリピリしています。最終的に彼は元気になって、ご実家に帰って、今元気にしています。

何を言いたいかって言うと、彼が元気になったきっかけは、私といろいろ喧嘩をしたりするわけですが、頭からバケツをかぶせられるようなことがあって、私は家族と同じように、うちのようによく過ごしていいよ、家族みたいだよって言っていたのです。しかし、あるとき、家に帰ったら、昨日までちょっと調子が良くて、手伝ってくれて私が油断したものもあるのですが、次の日、家に帰ったら空気が冷たく感じました。この水のような空気はどこから来るのだろうか？ うちにいたときは20歳くらいになっていたその子は私に言いました。「あなたの心に聞きなさい」。私？ 私今何もしてないけど。いろんなことがあって、私が怒ったんですね。「もう家に帰りい！」って。「面倒見きれない。私は別に一円ももらっているわけではなく、なんでもなくいろんな介護をしたりしながら、たまたま出会というちで一緒に生活しようってことになったのですが、もう家に帰りなさい。」って。そうすると彼は怒った。「それがあなたの本音です」。「家族って言ったけど、家族じゃない」。でもそれは事実ですね。そのことがあって、私は彼から学びましたね。「本当だな」って。家族みたいになんてきれいごとと言っているけども、私は別にその道の専門家でもないけれども、なんか役に立つと思っていた私の心が驕りであったということに、気づかされた瞬間でした。

その後いろいろあったのですが、最終的に彼が立ち直ったきっかけというのは、私のおかげでも何でもありません。私が謝る場面はいくつもあるのですが、何かのはじめ「ごめんね」って言って後ろから抱きしめるようにして謝った瞬間があったのです。その時に、「これをお母さんにしてほしかった」と言いました。この感覚。僕が青い

鳥のように求めていたこの感覚。この力が抜けるようなこの感覚をずっと探してきたのです。

だから、自分の中にないものは、言えないのです。幼児教育が大事とか、就学前がとかスキンシップとかいろいろ言われるけれども、何もバタバタバタ抱いたり触ったりするという意味ではなく、ホッとすることが出来る体験が大切です。子育ての中で怒ったり、いろいろあってもいいわけですが、でも親子がお互いに、ホッとしたという瞬間。ああ癒されたという瞬間。そのことが、実は人生の中ですごく大事な意味を持っています。

もし、それをされなかった、という方で大人になった場合は、今度自分の子どもで抱きしめながら、充電されながら、もう一回トライしてみる。あるいは友達でももちろん構いません。隣のおばさんでもいいです。仲間でもいいです。誰かとホッとするという関係を人間は作れた時に、生きやすくなります。

もしかしたら、自分が、「頑張ろう、頑張ろう、頑張ろう」と思った本当の自分を出せなかったら、ずっと演じ続けなければいけないことになり、非常にそれは苦しくなってきました。彼は「僕はいい子でいなきゃいけないと思ってずっと演じてきたんだ」ということに気付いたのです。それが身につくすぎて演じていることも分からなかった。それは、すぐに私はお母さんに連絡しましたがけれども、実は彼にはアザがあって、外から見たらわからないのですが、言われてみれば顔にアザがある。すぐにはわからないアザです。本人のコンプレックスというのは、本人が感じるからコンプレックスですよ。周りがいくら大丈夫と言っても本人が気にすることがコンプレックス。でもそれは、実はその子は生まれたときに、おじいちゃんおばあちゃんが結婚に反対をして。彼にアザがあったときに、それは、おじいちゃん悪気はなかったと思うのですが、病院に、「ホラお前たち結婚に反対して結婚したから子どもにアザができたじゃないか」と言われて、そのお母さんは非常にショックを受けて、思わず、ゴシゴシゴシ、ひたすら、何とかアザを取ろうと思って、お風呂に入るときにものすごく力が入っていた。彼はそれを、覚えていました。

つまり、アザがあるのが僕。しかしお母さんも

お父さんも、アザがない僕がほしかった。つまり自分を、本当に受け入れてくれていたのではないという感覚がずっとあって、どうすれば親に気に入ってもらえるんだらうって頑張ったのですが、だんだんと息切れしてしまって、高校卒業する前に疲れ果てた。それが彼の姿です。

一方で、家庭内暴力の子どもをお預かりしたのですが、彼の場合は包丁を持って、お母さんを追いかけてまわしました。「謝れ！謝れ！」と言って。それも、こんなに大きくなって。彼もおかげさまで自立したのですけれども、こんなに大きいのですが、気持ちは3歳くらいで止まっていて、自分が小さい時に、お母さんが料理をしながら、怒るときには僕の方に包丁向けたというのです。「怖かった。嫌だった。でも、お母さんはその時会社が潰れかけていて、一生懸命働いていた。子どもなりに僕は頑張ってお母さんに協力したつもりですが、お母さんは凶に乗った。協力するのが僕だと思った。いくつになっても褒めてくれなくて、いくつになってもまた要求が高くなって行って、とうとう僕はキレた。」って言っていました。あの時の怖さを、僕の嫌さ加減を分かってもらいたいと思って、したら親が警察に通報した。僕を病院に連れて行った。「なんで？子どものときに自分もしたのに。一言ごめんって言ってほしかっただけなのに。だから僕はキレた。」と書いていました。

これは、親子関係の長さなのです。小さい時だけが親子ではなく、子育てというのはずっと長い。でも、人生の中でやり直しはいくらでもききます。お互いに気付いた瞬間に、リカバーできる部分がある。もつれた糸も、年齢がいけばだんだんほどけるようになります。ほどけ始めたらあつという間にほどけます。何が原因か、年がいくほど意味が分からなくなります。互いに。小さい時だからこそ、解決できること、一秒で済ませることがあります。本当に怒った後に名前を呼ぶだけで。ギョってするだけで解決することが、小さい時はいくらでもあります。それを抜かしてしまうと、大人になって、なかなか解決しにくい部分もある。

何歳になっても、「帰りたい家」「会いたい親」

最後になりますが、いろいろ介護させてもらっ

てきました。私は孫の嫁なのです。108歳のおばあちゃんのお世話をさせてもらいました。今も私も本当に、今も休みでこんなところでしゃべっていますが、まだまだ道半ばで勉強が足りないし、人生の体験もまだまだ少ないと思いますが、そのおばあちゃんが死ぬとき何て言ったか。認知症になったり、いろんな介護の人がいるのですが、その108歳のおばあちゃんは、枯れ枝のように、認知症にもならず、本当に一年くらい寝込んだだけ。いつも「ありがとう、ありがとう」。悪いことは絶対言わない。すぐ「ありがとう」。孫の嫁の私に「ありがとう」。いつも「ありがとう」。ありがとうしか言わないくらいに、いつも「ありがとう」ばかりなのです。

それで孫の嫁の私は悪いことを言って、「おばあちゃん。天国行ったら誰に会いたい？」とか悪いこと聞いたんです。そうすると、なんて言ったと思います？ 108歳で、8歳のときにお母さんが亡くなっていて、お嫁に行ったのが18で、90年間大方さんの家に住んでいる。それなのに、お母さんに会いたって言うんですよ。息子であるおじいちゃんのほうが先に亡くなり、夫であるおじいちゃんも先に亡くなっているの、子どもかな？ 夫かな？ と私は思いましたが、お母さんって言いましたね。100年前にもうバイバイしているのに。

その時に歌ってくれた歌。一曲だけ、背中あやしで。明治の時代ですから、物もなくて、電子レンジももちろんないし、いろんな仕事をしながら、あやし遊びも何も同じで、背中でおんぶしていただけらしいですが、その時に歌ってくれた歌を、歌ってくれって言って、孫の嫁の私が歌うと、それはおばあちゃんの顔ではなくて、8歳の子どもの顔になるのです。懐かしいって。音楽療法とかいろいろ言われますが、大人になって懐かしいと思える歌がたとえ一曲でもあったら。生きていくときにほっとするかもしれない。これは別に子守唄でもなんでもいいんですよ。時代によってですね。そういうことを、おばあちゃんは言っていました。

おばあちゃんは「家に帰してくれ。」それで、「90年間おばあちゃんここに住んでいて、おばあちゃんこの家の主やん。」って言いましたが、「いや、家に帰りたい。」って言いました。これは、現代の課題です。帰りたいと思うような家が今あ

るのか。会いたいと思うような人がいるのか。これだけ便利になって来たけれど、情報は多いけれど。それは、これからの時代は親ではないかもしれない。家族じゃないかもしれない。保育園かもしれない。幼稚園かもしれない。子育てセンターかもしれない。できれば親子であってほしいけれど。でもだれか、そういう場所や人がいるだけでも、人は生きていくときに楽かもしれない。私

は、とても自分の子どもが死ぬときに、私に会いたって言うてもらって自信はないのですね。そうなりたいと思っていますけれども。また皆さんも、考えていただけたらと思います。

時間になりましたのでこれで終わりたいと思います。何かのお役に立ててくだされば、幸いです。ありがとうございました。